『李子粋語』と李星湖と『四七新編』

小川晴久

はじめに

『李子粹語』は李退渓（一五〇一―一五七〇）の思想の要語を中国の『近思録』に倣って、主題別に編纂したもので、李星湖（一六八一―一七六三）が若い頃に抜き書きして『道東編』と名付けていたものを、弟子の安鼎福と尹東圭が『近思録』の体例に倣って編集し直して、一七五三年に完成させたものである。弟子たちが若干補充したものはあるが、ほとんどは李星湖が李退渓の作品（とくに手紙）を読んでその要語（粹語）を若い頃に書き抜いた『道東編』が元である。李星湖は四十数年修正を施さないまゝにしていたのを残念に思い、弟子の安鼎福に校訂を託したところ、安鼎福は李退渓の原本と付き合わせているうちに、『近思録』の体例に倣って「添刪」を加えることを師に提案し、その許可を得て、同学尹東圭と協力し、三たび稿を易えて完成させ、李星湖が李子粹語と命名して今日の形になった。李星湖七十三歳の時である。『李子粹語』の編者は李星湖である。たゞ安鼎福らの貢献（近思録に倣うことの提案）も大であるので、編者は複数であるというイメージが伴う。

『近思録』の体例は「道体」（51条）、「為学」（111条）、「格物窮理」（78条）、「存養」（70条）、「改過遷善、克己復礼」（41条）、「斉家之道」（22条）、「出処進退、辞受之義」（39条）、「治国平天下之道」（25条）、「制度」（27条）、「処事之方」（64条）、「教学之道」（21条）、「改過及人心疵病」（33条）、「異端之学」（14条）、「聖賢気象」（26条）からなり、全14巻である。

一方、『李子粹語』の体例は次の通りである。

「道体」（77条）、「為学」（39条）、「窮格」（91条）、「涵養」（50条）、「力行」（49条）、「居家」（86条）、「出処」（34条）、「治道」（26条）、「政事」（23条）、「教導」（24条）、「警戒」（61条）、「異端」（17条）、「聖賢」（68条うち中国24条、朝鮮44

条)。

ほゞ『近思録』に倣っていることがわかる。両者のちがいは、『近思録』が主に北宋四子(邵康節を除く)の語を集めたのに比し、『李子粋語』は李退渓一人の要語である。

実は以上の程度の認識で本学大学院の演習で二〇〇三年度から『李子粋語』を読み進んできた。今年で五年目で、「教導」まで読了し、あと一年で会読は終る。

ここまで読んできた私の『李子粋語』観は、李退渓の思想を体系的に知る便利なダイジェストと言うものであった。李星湖の『道東編』が基礎となっていることを知っても、そのような作業があったのかという程度の反応で、私の関心は『李子粋語』の内容の方に一貫してあった。ともかく便利なダイジェストという域を出ないものであった。したがって本誌に『李子粋語』を紹介しようと思い立ったのも、内容の紹介をしようと考えたものであった。

ところが最近、李楠永氏の論文「星湖李瀷の退渓観とその実学論」[1]という論文を読んで、肝心なことを知るに至った。

李星湖の父南人系李夏鎮が庚申大黜陟(一六八〇年)によって司憲府大司憲の職から晋州牧使に左遷され、続いて平安道雲山郡に流配され、李星湖がそこで生まれたこと、父親は彼が一歳のとき死去したこと、また彼が二十六歳のとき、彼の事実上の師であった仲兄の李潛が張禧嬪側に与(くみ)して上疏し、当時の執権党老論を批判して、逆賊として杖殺されるという悲劇に遭遇したこと、丙戌(一七〇六年)の一事といわれるこの悲劇を契機に一生を処士で通す決心をし、孝子として母に仕える外は、学問に専念したこと、李退渓に私淑して先の道東編は三十歳前後に出来ていたことを知った。

それまでの私の李星湖観は、実学三流派の一つ、経世致用学派の象徴的存在、百科全書的著作『星湖僿説』の著者、

西学にも積極的関心を向け、摂取につとめたこと、茶山丁若鏞にも大きな影響を与えたこと位のものであった。実学派（経世致用学派）のリーダー、尨大な著述、西学の理解者、このような理解には、不覚にも、南人系ゆえの父と兄の死と仕官の杜絶という決定的ダメージ、若い頃の李退渓崇拝という事実の認識は欠落していた。

数年前に貨幣経済を否定していたという意外な側面[2]を発見し、それゆえにそれは一つの彼との出会いであったが、しかし、右のような大事な認識の欠落は、実は李星湖と全く出会っていなかったと言ってもいい程の認識の欠陥であった。

しかし、このような李星湖像の一面性は、私個人の特殊性と言うよりは、かなり一般的な傾向ではないかと思われる。その証拠に李星湖と李退渓の関係、『李子粋語』に関する論及や研究が少ないからである。前記李楠永論文（一九八三年）はその意味で貴重である。なぜ少ないか、その理由としては、韓国にあって実学の概念が17世紀以降に限定されていて（近代志向性と民族意識をもつ学問として）、実学者の代表としての李星湖と16世紀の朱子学者李退渓とは、学問傾向が大きく異なるというイメージが強いからではないかと思う。また李星湖は晩年李粟谷と柳馨遠を高く評価した（時務策として）事実も影響しているだろう。

しかし、今や朝鮮の17世紀〜19世紀の学問としての実学概念の内実が修正されなければならない時代を迎えている。この時期の学問を近代を志向した側面だけで捉えるのではなく、近代が失った実心を重んじた学問という側面を正当にカウントして、実心実学ととらえる時代が来たと思うからである。[3]

したがって李星湖編の『李子粋語』の存在とその研究は、李星湖を近代志向的な実学者とのみ捉えるのではなく（気を重視した李粟谷系統の上にのみ位置づけるのではなく）、理（道心、実心）をも重視した実心実学者（前者は今日的意味での実学、後者は実心の重視の側面）として捉える重要な根拠となるものである。李星湖の学問の実心的側面は、『李子

粋語』のみでなく、四七論弁に対する彼の見解や彼の経学理解である諸経疾書の研究も必要である。私の現在の予想では、17―18世紀の朝鮮の実心実学の形成者および典型は三人いて、一人は霞谷鄭斉斗（一六四九―一七三六）、一人は星湖李瀷（一六八一―一七六三）、三人目は湛軒洪大容（一七三一―一七八三）である。鄭斉斗は朱子学と陽明学を後者の立場で統一せんとした実心実学（実心は陽明学、実学は朱子学）、李瀷は李退渓の学と経世致用の学（西学も入る）を統一した実心実学（前者が実心、後者が実学）、洪大容は師金元行系統の実心を重んじた経学と天文学・実用教学を結合した実心実学。この三つの実心実学は形成過程（系統）や重点の置き所に差異はあるが、実心（修己や天の側面重視）と実学（治人や人の側面重視）の両方を兼ね備えている点では同じである。その中で洪大容の実心実学を今まで日本の同時代の三浦梅園の実心実学と合わせて、私は21世紀が必要とするバランスのある学の模範として高く評価してきたが、今後は李星湖の学＝実心実学も、17・18世紀の朝鮮の実心実学の中で大きな比重を占めることが予想される。本稿がその研究の出発点となることを自ら期待している。

長い前書きで恐縮であったが、以上の経緯と観点から、本稿の構成は以下のようになる。

一、丙戌の一事と仲兄の教え
二、星湖の退渓観と李子粋語の存在意義
三、李星湖の四七新編
四、李子粋語に見る四七論
五、『李子粋語』中の粋語

一、丙戌の一事と仲兄の教え

父夏鎮の流配と死は彼が生まれる前後であったので、彼に大きな影響を与えたのは彼二十六歳（一七〇六）のときに起きた仲兄潛の上疏と杖殺であった。仲兄実に四十七歳の時であった。仲兄は星湖の学問上の師であった。仲兄の死は壮絶を極めたものであった。星湖が四十四歳になったとき、仲兄の「丙戌の一事」と仲兄を回想した詳しい一文が手紙として残っている。

一六八九年時の国王肅宗は張禧嬪との間の子を世子にしようとして実行した。宋時烈ら老論派はそれに強く反対し、宋時烈は流配先で賜薬（死）する。一七〇一年肅宗は考えを改め、張禧嬪に死を賜る。所謂辛巳の獄である。仲兄は世子（東宮）を守ろうと必死になる。星湖の回想は以下の様である。

「仲兄西山公、平生は只丙戌一事にて足る。……国に辛巳の獄あり。その後、凶徒藉口して、変怪属生す。公世を慨き国を憂ふ。色辞に形はれ、殆ど寝食安きなし。常に私かに人に曰ふ、父母の邦危亡に阽（＝臨）む。肉食（＝高位者）謀なし。吾が君を奈如せんと。

丙戌、儒生林溥、言を以て罪を得、兄弟駢戮さる。国人是に於て敢て鹿を言ふ（＝明言する）者なし。公遂に抗疏の計を定め、室に秘みて独り草し、家人に泄れず。疏既に具はる。人之を覚る。之を難ずるに嫠緯（＝寡婦）の憂を以てするあり。公曰く、吾家世の厚恩、庶氓と同じからず。況や出位（＝越権）の嫌小にして、扶顚の義大なるをや。一身を以て三百年の宗祊（＝宗廟）に殉ずるは、猶ほ補あるに庶幾きなり。吾何ぞ惜しまんやと。疏喉（＝喉院）に入る。司之を卻く。之を卻くるは、蓋し渠首に及ぶを謀らんと欲すればなり。公は即ち闕下にて口占一律して以て志を見して云ふ、「孤雲不動日分明　禁漏遅遅禁樹平　九虎司門霊鎖邃　玉楼高処儻通誠」と。

翌日承旨弘楨等嗾を受け、啓を進めて幻辞罪を請ふと。疏中左右前後「向刃春宮」の語を拈りて以て上怒を挑す。是に於て即ち庭杖を命じ、親しく向刃の語を詰る。乃ち九月十七日なり。公指陳すること明白、屈撓する所なく、以て疏中の意を申し、且つ曰く、臣は東宮のために死するは、恨む所なし、たゞ四皓を踵がんとするも時に遇はざる者なりと。上益々震疊（＝おそれおののく意）を加へ、左右の群僚承顔せざるなし。石を下して以て雷霆を助く。嗚呼何ぞ言ふに忍びんや。

是の時に当り、親戚走匿し、知旧手を揺り言を諱む。禁扃の内、弱水を隔てるが如し（遠くて到り難きの意）。独り侍衛の一武士あり。素に非ざるなり。義にして之を哀れむ。時に来りて略その梗慨を道ふこと此の如し。この後或ひは庭杖、或ひは本府にて杖す。訊刑益々急なり。二十五日に至りて公は則ち死す。時に素霓干レ日の異あり。」

右は上疏から杖殺に至る経緯である。

仲兄の人となりと性格は次のように簡潔に示される。

「物外を高尚し、万累を脱屣す。敦素（質朴の意）を楽しみ、縁飾を去る。謙恭を執りて、矜肆を陋む。人の美を揚げ、人の困に急たり。軒軒（自得の意）として奪ふべからざるの気像あり。」

注目すべきは学問態度である。

「公の晩年頗る経学に留意す。毎に曰く、先賢の註解は、要は之をして経文を究極せしめんとす。それ軽重の別を無みせんと欲するに非ず。今参錯（いりまじる意）混誦、義或ひは相い掩ふ。故に既に熟すの後、便ち経文に専心すべし。得る所自ら別なりと。」

末尾の「自ら別なり」は程伊川の「凡そ実理、之を心に得れば自ら別なり」（程氏遺書巻15）を踏まえている。伊川

の実理とは「実見して是を得、実見して非を得」て得られる真実の認識のことであって、火事や洪水の恐ろしさがわかっているような、またかつて虎に襲われて傷を負った人が虎の恐ろしさを真底から知っているような認識のことを指す。仲兄は伊川のこの言葉を踏まえて言っている。

先人の註解を十分に活用した上で、最後は経の本文（経文）に心を集中して意味を取れ、そうして得られた自得の理解は口耳の徒の解釈とは「自ら別」であると言うのである。

星湖は二歳のとき父を亡くしている。星湖の師は仲兄であった。彼が受けた教育も次のようなものであった。

「その蒙士を教誨するに、必ず先ず正音にて読み、以て程規を立つるあり。故に巻を執る者一たび斆（＝学）導を経ればば、終身之に頼る。」

正音にて読む、または正しく音読するとは経文を正しく理解した上で、それを暗誦することを意味する。程規とは程課（一日に読む分量）のことであろう。慌てず急がず、キチンと読む。このようにして理解したものは生涯忘れず、役に立つであろう。このような読書の仕方は、先の自得の仕方と共に、星湖の経学に大きな影響を与えたものと考えられる。

今一つ。礼の実践の重視である。

「又曰く、礼は習はざるべからず。習はざれば則ち荒む。吾僻静（片田舎の意）に就きて壇を為り、家塾の子弟と行なひ且つ之を習はんと欲す。此れ蓋し志あるも未だ就かずと。」

この遺言は星湖によって実践された。星湖は経学や時務策の他に、礼学を重視した。尨大な『星湖礼説類編』全六巻はその証しである。

事実上の師であった仲兄の「丙戌の一事」の死によって、彼は科挙試を断念し、門を杜して、母につかえるほかは

読書に専念した。幸い父が中国から購入してきた家蔵の書が数千冊あった。処士としての星湖の生活が始まったのである。

右の仲兄の回想は仲兄の親友であった息山李万敷に宛てた星湖四十四歳（一七二四年）の手紙においてなされた。星湖文集の中に仲兄に対する祭文や行状や墓誌銘はない。「上息山」（全集巻9）での回想は事実上の行状、墓誌銘であって、とても貴重である。すでに仲兄の死より十八年たっての回想であるが、仲兄の教えはこの間の彼の学問に、また結果的に以後四十年を生きることになる彼の生涯に大きな影響を与えたと思われる。

仲兄に次いで、彼に大きな影響を与えた人が李退渓である。次にそれを見よう。

二、星湖の退渓観と李子粋語の存在意義

李星湖が二十六歳の仲兄の杖殺を契機に杜門読書に専念するが、三十歳までに李退渓の書（とくに手紙）を読むのに専念したことが、『李子粋語』の元になった『道東編』が三十歳までに成っていたことで証明される。彼が李退渓に関心を向けたのは、同じ南人系として嶺南学派への親近感[4]もその一つであったろうが、幼くして父を亡くし、党争の中で兄が受難したという境遇が似ていることも、親近感を覚えた一つであろう。

李星湖の李退渓観は驚くほど高い。今日李退渓は朝鮮の朱子とよく言われるが、李星湖に言わせれば朝鮮の孔子であり、否それ以上であった。

退渓の高弟のある著書（『喪祭礼』）の序で次のように述べている。

「夫れ我東の退陶あるは、猶これ華夏の夫子あるがごとし。故に生民あるより以来、未だ退陶より盛んなるあらざるなり。」

（『聾隠先生喪祭礼』序、全集巻50）

次も同趣旨であろう。

「東方に退陶あるは、周末に聖人を生ずるが如し。仰ぐこと喬泰の如く、信ずること金石の如し。」

（『退渓礼解』跋、全集巻54）

退陶とは李退渓の別号である。

このような高い評価は一見異様に思えるが、『李子粋語』の序を読むとその根拠がわかる。丁寧に読んで見よう。

「周衰へて典礼魯に在り。聖人（＝孔子）帰して之を述ぶ。統緒伝あり。千五百有余年を歴して、紫陽子（＝朱子）生まれ、先王の道を明らかにし、薄海（＝四海）内外尊親せざるなきは、これ周礼の復行なり。東方は乃ち殷の太師（＝箕子）肇基の郷（さと）、遺風未だ泯びず。白を向び疆を画す。往往にして比（ならび）なき『坤乾』（＝殷の陰陽の書）の一端を徴するに足れば、則ち一区の仁賢の俗は殷の遺民にあらざるなきなり。二千余年を歴して、退渓子李子生まれ、六経を歩趨するに紫陽を以て依帰となす。実に殷の質に因りて周の文を用ひ、彬彬乎として大成するなり。

今天下質質として礼楽地を掃らふ。独り我邦先王の衣冠の旧を保守す。或ひは天意なるか。今幸ひにしてこの域中に生まれる者は、あに退渓の言を言ひ、退渓の行なひ、以て一脈の斯文を持扶するを欲せざらんや。濮生るるや後にしてその徒たるを得ず。たゞよくその書を読みて之を悦ぶ。竊かに自らよくその遺訓を該識せざるを以て大羞吝（だいしゅうりん）となす。輙ちその要を採りて之を録し、名づくるに道東編を以てす。爾来四十有余年未だ刊正に及ばず。」

一般に中国では孔子を一番高く評価する。周の文化を再興した人として。明代にあっては堯舜よりも孔子が高く評価された。[5] しかし李星湖は周の前の殷の王朝の文化をとりあげる。朝鮮は殷の箕子が基いを築いたといわれる。朝鮮には殷の時代の哲学書『坤幹』が伝えられた可能性はあるが、白を尚ぶ朝鮮の風俗には、殷の質実さが伝わっている。

朝鮮の民は殷の遺民である。

李退渓は孔子の死後、二千年のちに生まれ、孔子の編纂された六経の学を朱子に依拠しておさめ、大成させたが、殷の遺民としての殷の質なる素質を以て孔子と朱子が復興した周の礼や文化を大成させたのである。殷の質を以てという所が肝心である。殷の遺民である李退渓が、孔子―朱子による周の文化を大成させたという所に、孔子をも上まわる高い評価が与えられた根拠をみることができる。

中国書にも東夷の国は仁者の国という高い評価があった。殷の故地（殷墟）が山東省にあることを考えれば、殷の文化が隣りの朝鮮に色濃く残ったというのも宜（うべ）なるかなである。

このような構造をもって李退渓は李子という尊称を李星湖によって賦与された。李子粋語という命名は七十三歳の時であるが星湖自身による。李子という称には少なくとも東アジア世界で最高の人物という高い評価が含まれていることを見逃してはならないだろう。

となれば李退渓の言行の粋を集めた『李子枠語』は東アジアでの最高の書と李星湖によって含意されたことになる。我々の本書を見る目は一新されなければならない。少なくとも民族意識（ナショナリズム）の確かな芽生えをも見てとることができる。

三、李星湖の四七新編

李星湖の高い李退渓評価と一見矛盾とするようであるが、『道東編』をまとめた直後に『四七新編』[6]という作品が編まれたことも、ここで踏まえておこう。少なくとも三十五歳頃迄には編まれていた。

「濵三十年前　四七新編一部を妄撰す。」

〔「答権台仲　乙丑（＝一七四五）」〕

『四七新編』の附録には「読退渓先生書記疑」が付されているが、二ヶ条退渓の説に対する疑問が記される前に、次の一文がある。

「退渓先生の書固より通曉するも、予或ひは言下に未だ領せず。輒ち敢へて之を識して後考となし、吾学の進を証せんと欲す。」

『四七新編』が『道東編』を成した後に編まれたことが、これでわかる。

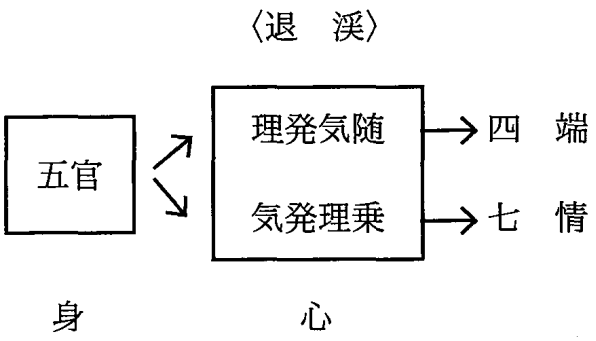
実は李退渓が晩年弟子の奇高峯との間で交わされた四七論弁（四端と七情の理解をめぐる論争）に対し、李星湖が李退渓の立場を支持して、奇高峯や李栗谷の気の立場からする四七理解を批判して、『四七新編』なる作品を発表していることも、前記李楠水論文で知った次第である。

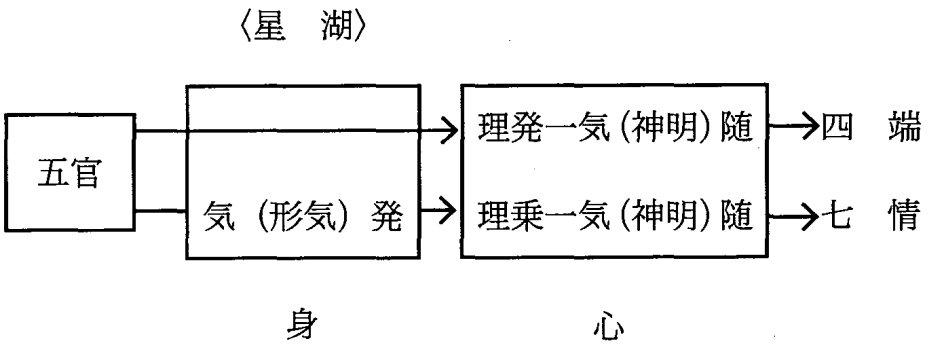
この論争で星湖は李退渓の立場を断乎支持しているが、中国では問題にならなかったのに朝鮮では四七論争が生じてしまい、それが延々となされるに至ったことには若干李退渓にも責任があると指摘して、この論争に終止符を打つために『四七新編』を編んだ。『道東編』を編む中で必然的に生まれた作品であるので、ここでその内容を踏まえておきたい。幸い李星湖の四端七情論を緻密に分析した先行研究（金容傑「星湖哲学の四・七善悪論と心活論の展開」『星湖李瀷の哲学思想研究』所収一九八九年）があるので、その分析結果を紹介したあと、『四七新編』の原文にも当ろう。

李退渓は四端は理発、七情は気発という立場に立ちながら、四端は「理発而気随之」、七情は「気発而理乗之」と規定した。これに対し奇高峯は、四端（惻隠、羞悪、辞譲、是非の情や心）は七情（喜怒哀楽愛悪欲）の中の善一辺であって、七情の中に含まれると主張した。

李栗谷は奇高峯をもっと徹底して、四・七共に「気発理乗一途」説で説明した。

李星湖は「理気各発」説の立場に立ちながら、「理発而気随一路」説を主張したという。金容傑氏は退渓の立場に立ちながら星湖の独自性を次のような図式で示した。





李星湖は気を二種類に分けた。大気と小気である。大気は形気の気、小気は心の働きをなす神明の気である。退渓や星湖は四端は理発であるとは言っても、理気は一体であるという立場に立つ。理がまず発して、次いで気がそれに随うという前後関係ではないと言う。その上で七情の方を気発とみとめた所を形気の気に触れると解して、実際の心の動きはあくまでも神明の気が理発（四端）、理乗（七情）に随う形で発動すると解して、心の働きのところは同じであるとした。そこを大きく見て「理発（乗）而気随一路」と把握したのである。

星湖が退渓を高く評価したのは理発の堅持であった。とくに星湖が奇高峯に同意できなかったのは四端を七情に包含させたことにあった。心は七つとは限らない。四端は道心である。公そのものである大切な道心が形気の私に触れて発動する七情の中の「善一辺」である筈がないというのが星湖の立場であった。公私ははっきりと区別される。

ここで李星湖の『四七新編』から彼の生(なま)の見解を紹介してみよう。

李星湖は、四端と七情の関係は、道心と人心の関係ですっきり解決されると言う。

「書に曰く、人心惟れ危く、道心惟れ微なりと。此四七の由りて起る所なり。人心道心、情に非ざるなきなり。四端七情、情に非ざるなきなり。」

すでに「道心は理発、人心は気発」と朱子が言っていた。四端は理発、七情は気発でいいのであると。

道心と四端は等置してよい。人心と七情はにわかに等置はできないが、人心が危いのは七情があるからであって、両者は深い関係にある。七情を除いて人心を語ることはできないと、朱子の見解を引きつゝも、ほゞ両者を等置してよいという方向で考える。たゞし人心は人欲ではないとそこははっきり峻別する。

四端と七情の関係を道心と人心の関係で大きく捉えていたのが星湖の四・七論の特徴である。これを念頭に置くと四端と七情の公私のちがいがはっきりしてくる。

「七は本より吾私分の上の物事に繋るなり。…七情は学ばずして能くするなり。その学ばずして能くする所以の者は、形気の私に見はれて天理の拡を待たざる故なり。」(七情字義第二)

「乃ち四端の若きは、自らこれ純たる天理にして公なり。」(四七有異義第七)

七情が私であるのは、人心の人は人身を意味するからである。

「人は即ち人身なり。身は形気なり。食せざれば飢ゆ。衣ざれば即ち寒し。掐(う)てば則ち痛く、爬けば則ち痒し。形気の必ず有る所なり。先ず飢寒痛痒ありて、而る後に欲悪形はる。欲悪は七情の大端なり。」(七情便是人心第八)

公と私の定義が明確に示される。

「公と何ぞや。吾私に繋らざると雖も一に己に視るものなり。此れ即ち理の為なり。」(聖賢之七情第四)

「人を愛す、物を愛すの愛の如きは、即ち四端の公、之を博くするを貴となす。
暖を愛す、飽を愛すの愛の如きは、即ち七情の私、ここに博の字は下し得ず。
公なる底(もの)は便ち只これ惻隠の心のみ。
私なる底は己の便好に縁りて生ずる者に過ぎず。」（四七有相似処第五）

『四七新編』の序を読むと、彼が、李退渓と奇高峰によってひき起こされ、一旦収った論争が、李栗谷が奇高峰を支持して、その説をより徹底化したために再燃された一連の論争をたどっているうちに、彼自身が筋がたどれずに、倦き〳〵して中途で放り出したことが一度や二度ではなかったという、注意すべき指摘がある。その責任の一端は李退渓にもあったと。

「予夙歳より繙閲紬繹するも要領を得ず。輒ち意倦きて止むこと一二にあらず。竊かに嘗て謂ふ、退渓詳悉に似たりと雖も、或ひは直截を欠けば、即ち寧ろ此を舎てて彼に従ふ。又又朱夫子の証援あるを以ての故に、未だ敢てせざる所あり。」

李退渓の議論は詳悉ではあるが直截さを欠いているので、自己の見解を捨てて奇高峰の説に従うことがあったり、また朱子の援護があるので、敢へ論じない所もあったと。

四・七論弁の吟味を中断した李星湖であったが、しかし「義理は公天下の物」であることを思いおこし、「古人は自ら古人、今人は自ら今人、何ぞ同を必とせん」と考えて、『孟子』や『礼記』礼運篇らの原典に当り、自ら考察を加えた所、自ら得心のいく解答を忽ち得たという。

「乃ち孟子礼運等の本書を取り、参互究極す。忽ち契あるが若し。之を心に体し、之を事に験して、益々意趣を見る。返して之を退渓の書に求むれば、始めて鑑鑑として徴すべし。始めて知る、海の如き滚波の談、本より初学破

的の訣にあらず、而るに重ねて先生の書は亶詞（ほしいままの言の意）にあらざるを信ずるあり。」

四端は孟子、七情は礼運を原典とするが、その二書を相互に突き合せ、比較対照し、考察するうちに、忽ちスッキリした解答を得たのであろう。契あるが若しの契は、割り符がピッタリ合う意である。道心人心を前提にし念頭に置き、公と私を峻別し、気を大気（形気）と小気（神気）に分けて考えることによって金容傑氏の分析結果の先の図解のような李星湖の四・七説が、脳裏にひらめいたのであろう。それを自分の心で吟味し、事物で検証して、益々意趣（あじわい）が湧いてきたという。まさに自得の境地である。

その上で、李退渓の書（とくに奇高峰あての書簡や関連する書簡であろう）を読み返してみると、彼の見解ともピッタリ合う。退渓の言に納得してスタートしながら、論争をたどるうちに退渓の説にもあいまいさがあることに気づき、やゝ評価を落したキライがあったが、独自に原典に当って自得した見解を持つ退渓の説をよみ直してみると、自説によく合うことを再発見して、李退渓の評価が以前のものよりも一層増すことになる、このようなプロセスを見てとることができる。これは李星湖の李退渓評価を考えるとき、とても興味深いことである。先に見た異常に高い李退渓評価は再度の李退渓評価に基づくものと考えると納得がいく。従子の李秉休が星湖を東邦の朱子と評価したのもあながち不自然でないことは、彼の『四七新編』が李退渓の見解より一歩進んでいることを見てもわかるが、しかし李星湖はやはりその地位を退渓に譲ったのである。

『四七新編』の序は今一つ、読む者を驚かせる程の厳しい指摘から始まっている。その厳しさも四・七論争をたどった以上のようなドラマを踏まえるとき、納得できる性格のものである。理発の大切さから出発した李星湖が、自らの独自の作業の結果自得して改めて正しさを立証した理発説であってみれば、性情の正しい理解がどれほど大切なものかを骨身にしみて体感した者の、真剣そのものの言明である。こゝに紹介するにもっとふさわしい。

「人は耳目あらざるなきも、声色の著を弁ぜざる者は耳目なき者なり。心あらざるなきも、性情の妙を察せざるは、これ心なき者なり。耳目なければ則ち命じて聾瞽と曰ふ。形を病むなり。心なければ即ち命じて愚と曰ふ。天を病むなり。形病めば則ち害は外物を弁ぜざるに止まる。天病めば則ち以て自立する無くして身随ひて亡ぶ。人は徒に聾瞽の患たるを知るも、愚の最も悪むべきを知らず。惑へるかな。」

性情の妙、すなわち四端と七情の関係や、道心と人心の関係、とりわけ前者の関係をキチンと理解しないのは心がないに等しいという。この真剣さ、この気迫に、瞠目すべきである。

四、李子粋語に見る四・七論

四・七論争での星湖の立場がわかると、『李子粋語』の冒頭を飾る「道体」篇が四・七論で生気を帯びてくる。李退渓の四・七論を示すものをピック・アップしてみよう。

先ず退渓と星湖が理発を重視しているので彼らの理を確認しておこう。

理は実であり、虚であるという。

「その真実無妄よりして言へば則ち天下理より実なるはなし。その無声無臭よりして言へば則ち天下は理より虚なるはなし。只無極にして太極の一句みるべし。」

無極にして太極の太極は真実そのものを指す。無極は法則性そのものを指す。理の虚なる性格は加損がないとも言われる。

「理は虚なる故に対なくして加もなく損もなし。」

また理は気に所有されたり、物によって限定されたりしないという。

「理の体たる、気に囿せられず、物に局せられず。」

真実とか法則性は確かにこういうものである。

次に**理と気の関係**である。

理と気は互いに離れることも、また互いに雑(まじわ)ることもしないと言う。この関係は混然とした一物でもなく、また判然とした二物でもないという実にうまい言い方で示される。

「理と気は本より相い雑(まじ)はらず、亦相い離れず。分けずして言へば則ち混じて一物と為(なさ)ず。而してその相い雑はらざるを知らざるなり。合せずして言へば則ち判然として二物たり。而してその相い雑はらざるを知らざるなり。」

理は限定されず、気は限定がある。

「理は限量なし。惟だ気には限量あり。形ある故なり。」

理気の不即不離の関係は次のようにお互いを顕在化させる。

「理動けば則ち気随ひて生ず。気動けば則ち理随ひて顕らかなり。濂渓云ふところの太極動きて陽を生ずとは、これ理動きて気生ずるなり。易に言ふ、復はそれ天地の心を見はすとは、これ気動きて現顕なる故に見るべきなり。二者皆造化に属して二致にあらず。故に延平復天地の心を見るを以て動と為し陽を生ずとす。」

気が素材であるに比して、理はそのものの法則性や真実性であって、すべての存在は理と気からできていると言えるのであるが、両者が合してできているものに心というものがある。**心**は次のように説明される。

「理気合して心となる。自然に虚霊知覚の妙あり。静にして衆理を具ふ、性なり。而してこの性を盛貯該載する者は心なり。動きて万事に応ずるは情なり。而してこの情を敷施発用する者は亦心なり。故に心は性情を統ぶと曰ふ。」

心の虚霊、知覚のはたらきのうち、虚霊は心の本体、知覚は事物に応接する手段とされている。

いよ〳〵**四端と七情の関係**である。

「四端の発は純理、故に不善なし。七情の発は気を兼ぬ。故に善悪あり。」

「四端の発、孟子既に之を心と謂へば則ち心は固より理気の合なり。然れども指して言ふ所の者は則ち理を主とするは何ぞや。仁義礼智の性、粋然として中に在りて四者はその端緒なり。七情の発、程子之を中に動くと謂ふ。朱子之を各々当る攸ありと謂へば、則ち固より亦理気を兼ぬなり。然れども指して言ふ所の者則ち気に在るは何ぞや。外物の来りて感じ易くして先ず動く者形気に如(し)くはなくして、七者はその苗脈なり。」

そして**公式の登場**。

「四端は物に感じて動く。固より七情に異ならず。但四は則ち理発にして気之に随ふ。七は則ち気発して理之に乗ずるのみ。」

では悪はいかにして生ずるか。注目すべきは、四・七両方に於て論じられる。

「四端の情は、理発にして気之に随ふ。自ら純善にして悪なし。必ず理発なるも、未だ遂げずして、気に揜(おお)はる。然る後流れて不善となる。

七者の情は、気発にして理之に乗ず。亦不善あるなし。若し気発して中らずしてその理を滅せば則ち放たれて悪を為すなり。」

四端の情における悪は、理発が最後まで完遂せず、途中で気に蔽わてしまった場合であって、四端そのものはあくまでも善である。この見解は星湖も同じである。

李星湖は気に大気（形気）と小気（神明の気）の二つを見たが、神明の字は李退渓の次の一文に見える。

「朱子曰く、神は理の気に乗じて出入する者なり。滉謂ふ、神明の神須らく作して此の如く看れば方にその妙を得べし。全く気字に靠れば、便ち些子麁に了ると。」

以上は『李子粋語』冒頭の「道体」篇（全73条）からの摘出である。

李星湖の四・七論を踏まえると、『李子粋語』の「道体」篇が生き〳〵してくる。

また『李子粋語』の「異端」篇の王陽明批判も決然としたものであることの根拠が、彼ら二人（退渓と星湖）の理発にあることもよくわかるのである。

「然れども陽明信に以為らく、人の善を見て之を好むも、果して能く好色を見て自ら能く之を好むの誠の如からんや。人の不善を見て之を悪むも、果して能く悪臭を聞ぎて自ら能く之を悪むの実の如からんや。孔子曰く我未だ徳を好むこと色を好むが如き者を見ずと。又曰く我未だ不仁を悪む者を見ずと。蓋し人の心形気に発する者は、学ばずして自ら知り、勉めずして自ら能くす。義理に至れば則ち然らざるなり。学ばざれば即ち知らず。勉めざれば即ち能はず。陽明は乃ち彼の形気の為す所を引きて以て此の義理知行の説を明らかにせんと欲するは則ち大いに不可。義理の知行は、合して之を言へば、固より相い須ちて並行して一分を缺くべからず。分けて之を言へば、知は之を行と謂ふべからざるは、猶ほ行を之を知と謂ふべからざるがごときなり。豈に合して一と為すべけんや。陽明の見は専ら本心に在り。一毫も外、事物に渉ることあるを怕る。故に只本心上に就きて知行を認めて一と為し、衮合して説き去く。」

知行合一説の批判であるが、人心と義理の峻別が根底にある。人心は形気に発する者で学ばずして自ら知るもの、勉めずして自ら能するもの、七情の側である。義理は形気を介在させなくても成立するもので、あくまでも理発でもある。広く見れば道心、四端の側である。

王陽明は理を気の理と見るので、理気の分の契機は弱い。四七の別、理発、気発の別が生死を分けるものとして厳しく発せられているのである。右の陽明批判は李星湖のそれとみまごう程のものである。

五、『李子粋語』中の粋語

前節で『李子粋語』道体篇から四・七論にかかわるものを紹介したので、以下は紙幅の許す範囲で、他の篇からいくつかを厳選して『李子粋語』のエッセンスを示したい。選ぶのは今度は私である。[7] ここには原文も付す。

為学篇

「必ず常に奪ふべからざる志、屈すべからざるの気、昧ますべからざるの識見ありて、而して学問の力日に淬み月に鍛へ、然る後に以て脚跟を牢着し、世俗の声利や威風のために掀倒せられざるべきに庶し。」

（必常有不可奪之志、不可屈之気、不可昧之識見而学問之力日淬月鍛、然後庶可以牢着脚跟、不為世俗声利、威風所掀倒也。）

「平易明白を以て道と為して、人の知るべからざるの妙あり。謙虚退譲を以て徳と為して、人の踰ゆべからざる実あり。存養日々純固を益し、踐履日々敦篤を加ふ。向上の功、進進として已まず。死に至るまで一日の如し。」

（以平易明白為道而有人不及知之妙。以謙虚退譲為徳而有人不可踰之実。存養日益純固、踐履日加敦篤。向上之功、進進不已。至死如一日。）

窮格篇

「尹彦明、程門に在りて、半年にて方に大学西銘の看を得。朱門、人に書を看るを教ふるに、極めてこれも遅鈍。日課は一二章に過ぎず。毎に云ふ、学者の書に於ける、前に進まざるを患へず、退歩する能はざるを患ふ。然る所以の者は、この学は専ら沈潜反復、精思熟翫に在り。久しくして後に漸くその門路を得。多を貪り、得るに務め、悤悤として趁ひ逐ふは、自ら学問の事に干らざる故なり。」

（尹彦明在程門半年方得大学西銘看。朱門教人看書極是遅鈍。日課不過一二章。毎云学者之於書不患不進前。患不能退歩。所以然者此学専在沈潜反復精思熟翫。久而後漸得其門路。其貪多務得、悤悤趁逐、自不干学問事故也。）

「書は須成誦すべきとは、張子の格言。天下の諸書尽くその成誦を欲すと謂ふにあらず。聖賢の書吾学に切なる者之を誦す。而してその誦や又今の講挙に応ずる者の脣腐歯落の為の如きに非ざるのみ。」

（書須成誦、張子之格言。非謂天下之諸書尽欲其成誦也。聖賢之書切於吾学者誦之而其誦也又非若今之応講挙者脣腐歯落之為耳。）

「書を看るに、心を労するに至るなかれ。切に多看を忌む。但意に随ひてその味を悦ぶ。窮理は須く日用平易明白なる処に就きて看破すべし。教熟優游、その已に知る所に涵泳たり。」

（看書勿至労心。切忌多看。但随意而悦其味。窮理須就日用平易明白処看破。教熟優游、涵泳於其所已知。）

「滉初めこの事に感発興起するはこの書の力なり。故に平生此の書を尊信するも亦四子近思録の下に在らず。許魯

斎嘗て曰く、吾、小学に於て之を敬すること神明の如く、之を尊ぶこと父母の如しと。愚の、心経に於る、亦云へり。」

（滉初感発興起於此事者此書之力也。故平生尊信此書亦不在四子近思録之下矣。許魯斎嘗曰吾於小学敬之如神明、尊之如父母。愚於心経亦云。）

涵養篇

「之を病を治むに譬へれば、敬はこれ百病の薬。一証に対して一剤を下すの比に非ず。」

（譬之治病、敬是百病之薬。非対一証而下一剤之比。）

「山止まらざれば則ち以て物を生ずる能はず。水止まらざれば則ち以て物を鑑る能はず。人心静ならざれば則ち又何を以て万理に該（あた）りて、万事を宰せんや。」

（山不止則不能以生物。水不止則不能以鑑物。人心静則又何以該万理而宰万事哉。）

「佳山麗水、幽間迥（けい）絶の処に遇ふ毎に、則ち或は壷を携へて独り往き、侶に命じて倶に遊び、徜徉嘯咏（しょうえい）、終日にして帰る。皆心胸を開豁（かつ）し、精神を疏瀹（やく）し、性情を資養する所以の一事なり。」

（毎遇佳山麗水幽間迥絶之処則或携壷独往、命侶倶遊、徜徉嘯咏、終日而帰。皆所以開豁心胸、疏瀹精神、資養性情之一事。）

力行篇

「人の一身理気兼ね備ふも理は貴く気は賤し。然れども理は無為にして気は欲あり。故に踐履を主とする者、養気はその中に在り、聖賢これなり。養気に偏る者は必ず性を賊ふに至る。老荘これなり。」

（人之一身理気兼備、理貴気賤。然理無為而気有欲。故主於踐履者養気在其中、聖賢是也。偏於養気者必至於賊性、老荘是也。）

「凡そ人の私意の生ずるは、正に思はざるが為の故なり。」

（凡人私意之生、正為不思故也。）

「真剛真勇は気を逞しくして強いて説くに在らずして、過ちを改むるに吝（やぶさ）かならず、義を聞けば即ち服すに在り。」

（真剛真勇不在於逞気強説而在改過不吝聞義即服）

「義理は無窮。故に学を為すも亦無窮。人心染め易し。故に省み改むること当に益々急たるべし。」

（義理無窮。故為学亦無窮。人心易染。故省改、当益急。）

「飲食男女、至理の寓する所にして大欲存す。君子の人欲に勝ちて天理に復るも此に由り、小人の天理を滅して人欲を窮むも此に由る。故に心を治め身を修む、是を以て切要と為すなり。」

（飲食男女、至理所寓而大欲存焉。君子之勝人欲而復天理由此、小人之滅天理而窮人欲由此。故治心修身、以是為

切要也。）

「礼の行はれるや、衣冠の飾、飲食の節、揖譲進退の則に外ならざるのみ。古人礼の一日も廃すべからざるを知る。故にその言に曰く、一たび失すれば夷狄となり、再たび失すれば則ち禽獣となる。豈に深く懼るべからざらんや。」

（礼之行也、不外乎衣冠之飾、飲食之節、揖譲進退之則而已。古人知礼之不可一日而廃也。故其言曰一失則為夷狄、再失則為禽獣。豈不深可懼哉。）

「居処必ず整静。几案必ず明浄。図書壁に満つるも、秩秩として乱れず。晨に起きて必ず香を焚く。静座終日。書を観るに未だ嘗てその惰容を見ず。」

（居処必整静。几案必明浄。図書満壁、秩秩不乱。晨起必焚香。静座終日。観書未嘗見其惰容。）

居家篇

「古人親を悦すに必ずしも官爵を以てせず。」

（古人悦親不必以官爵。）

「夫婦は至親至密と雖も亦至正至謹の地。故に君子の道は端を夫婦に造ると曰ふ。世人都（みな）礼敬を忘る。遽かに相い押昵して侮慢凌蔑を致して、至らざる所なきは、皆相い賓敬せざるに生ずる故なり。」

（夫婦雖至親至密而亦至正至謹之地。故曰君子之道造端乎夫婦。世人都礼忘敬、遽相押昵遂致侮慢凌蔑、無所不至

者、皆生於不相賓敬之故。）

「未だ嘗てそれ婢僕を詬詈するを見ず。如し失誤あれば亦必ず之に教へて曰く、此の事当に是の如くすべしと。未だ嘗てその辞気を変ぜず。」

（未嘗見其詬詈婢僕。如有失誤亦必教之曰此事当如是。未嘗変其辞気。）

「家屢々空しきに至るも、未だ嘗てこれを人に求めず。君賜る所あれば則ち必ず以てこれを隣に分つ。」

（家至屢空而未嘗求諸人。君有所賜則必以分諸隣。）

「郷に居りて、賦役は必ず人より先んず。人皆之に效ふ。」

（居郷賦役必先於人。人皆效之。）

「門弟子を待すること朋友を待するが如し。少き者と雖も亦未だ嘗て名を斥けて汝と称せず。坐定れば必ず先ず父兄の安否を問ふ。」

（待門弟子如待朋友。雖少者亦未嘗斥名称汝。坐定必先問父兄安否。）

「衆人と言ふ。その言に理あれば則ち欣然として之に応ず。如し理に当らざるあれば則ち黙して答へず。人自ら愧す。」

（与衆人言。其言有理則欣然応之。如有不当理則黙而不答。人自惶愧。）

「人の不義を聞かば則ち反復して嗟嘆す。人の小善を見れば、必ず再三嘉奨す。」

（聞人不義則反復嗟嘆。見人小善、必再三嘉奨。）

出処篇

「礼儀廉恥は国の大防たり。而してその責は尤も士大夫辞受進退の間に在り。」

（礼儀廉恥為国大防而其責尤在於士大夫辞受進退之間。）

「君を愛し国を憂ふるは至誠より出ず。田野に退処すと雖も、心は未だ嘗て朝廷に在らずんばあらず。常に君徳を輔養し、士林を鎮定するを以て先務となす。」

（愛君憂国出於至誠。雖退処田野、心未嘗不在朝廷。常以輔養君徳、鎮定士林、為先務。）

治道篇

「毎に根本を培養し、士林を扶植するを以て当今の急務と為す。」

（毎以培養根本、扶植士林為当今急務。）

「私は一心の蟊賊にして、万悪の根本なり。古より国家治日常に少なく乱日常に多し。滅身亡国に馴致するは尽くこれ人君一私を去る能はざるの故なり。」

（私者一心之蟊賊而万悪之根本也。自古国家治日常少、乱日常多。馴致於滅身亡国者尽是人君不能去一私字故。）

教導篇

「人を教へるに必ず小学を以て之を先にす。次に大学に及び、次に心経に及び、次に論孟に及び、次に朱書に及び、而る後に之が諸経に及ぶ。」

（人教必以小学先之。次及大学。次及心経。次及論孟。次及朱書而後及之於諸経。）

「人に教へるに必ず忠信篤実、謙虚恭遜を以てす。」

（教人必以忠信篤実、謙虚恭遜。）

警戒篇

「人は惟れ学ばざる故にその不足を知らず。その不足を知らざる故に過を聞けば怒る。」

（人惟不学故不知其不足。不知其不足故聞過而怒。）

「但己あるを知りて、他人あるを知らず。これ小病ならず。惟れ当に先ずこの病を去るべし。然る後に与にこの学を論ずべきのみ。」

（但知有己、不知有他人。不是小病。惟当先去此病。然後可与論此学耳。）

「拙を補ふは勤に如くはなし。煩を救ふは静に如くはなし。」

（補拙莫如勤。救煩莫如静。）

注

（1）『退渓学報』第36号（一九八二）所収。又『退渓学研究論叢』第3号所収。

（2）「論銭幣」『星湖先生全集』巻46。

（3）このことは最近あちこちで主張しているが、一番新しいものは、拙稿「実心実学とは何か」京都フォーラム機関紙『公共的良識人』第191号、二〇〇七年十月一日号所載。

（4）黄元九「李朝礼学形成過程」（『東方学志』第6号、一九六七年）、文玉柱『朝鮮派閥闘争史』（成甲書房、一九九二年）129頁の図参照。

（5）何心隠の「原学原講」。

（6）『星湖全書七』（驪江出版社、一九八四年）所収。

（7）私は六年前の李退渓生誕五百年の年に『李子粋語』から三つの文章を選んで拙稿を発表したことがある。「退渓の理の現代的翻訳と実践」（第17回退渓学国際学術会議論文集所収）

〔資料〕

四七新編序

星湖先生李瀷著

人莫不有耳目而不辨聲色之著是無耳目者矣莫不有心而不察性情之妙是無心者矣無耳目則命曰聾瞽病於形也無心則命曰愚病於天也形病則居止於不辨外物天病則無以自立身隨而亡人徒知聾瞽之為患而不知愚之最可恐者惑矣心者何性之邪郭也性有動靜心皆主之由動有幾四七之名起焉故耻忿之間各有苗脉充之而太和陽春放之而焦火燄氷苟欲緩身飭行舍此本何以哉是以古之務實者率於此而用力必求至于原頭處而無不純如也茲所謂學學莫先於治心治心莫先於致知知既至則行可以措矣行既成則英才可育也後生可記也於是六經四子若濂洛羣哲若我東儒賢之書爛爛在人目使有志者可以沿流泝源也雖然舜有人心道心之訓學者祖此為頭腦各有所指互明厥義孟子主言四端禮運主言七情好學論述禮運作說述孟子其言不翅詳盡其義若可以炯然而末學淺識乃復繚繞穿鑿務立新奇求明而反晦欲精而實亂至使蒙士有望洋向若之歎非聖賢顧後之意為有未鑒即使之迷之者之過耳惟知言之君子以言會意以意驗實分而為一而不妨

於混淪合而為一而無背於條理故朱子所謂四端理之發七情氣之發二句為總會之公案而發以衆說無罣礙之患矣退溪先生始回秋齋鄭靜而之說立為此論及見朱夫子傳心之訣而右信的當為之話頭以教學子蓋神會心得不以言而合者也當時傑士奇高峯明彦之倫猶不能言下領意辨說盈篋卒能反復歸正執經者於是乎無異詞矣至李栗谷叔獻之出復申此話長篇大牘累數萬言謂高峯初見未始有不是繼又儻議之起俗情偏頗功在亦一人皆疑二叫咻不可得而談矣予自夙歲繙閱紬繹不得要領輒意倦而止者非一二竊嘗謂退溪雖似詳悉或欠負截則寧舍此從彼又以有朱夫子之證援故有所未敢焉既而曰義理公天下之物古人自古人今人自今人何必同乃取孟子禮運等本書參互究極忽若有契體之於心驗之於事益見意趣返求之退溪之書始鑿鑿可徵始知如海滚波之談本非初學破的之訣而重有信於先生之書不置詞而已矣余將以此往質於先覺懼夫思起旋塞無以為考證之地遂成此編非敢與有傳後之功只隨手劄記如日錄之類異日或荷天牖差進一步不終為下愚之歸則又不知此編之不大駭於吾目中歟因為自戒無或輕出手也